

蕭常『續後漢書』諸葛亮傳贊について

田 中 靖 彦

はじめに

本稿は、南宋の人である蕭常が著した『續後漢書』諸葛亮傳贊に見える諸葛亮評價に関する部分を主な手がかりとした、蕭常の三国論および正統論に関する研究である。筆者は、蕭常『續後漢書』を手がかりとした南宋における正統論の展開に関する研究に取り組んできており、本稿はその一環である。本研究の全体的な問題関心などについては、田中靖彦・石井仁・中本圭亮「蕭常『続後漢書』の基礎的研究―序および四庫提要の分析を中心に―」（『實踐國文學』九七、二〇二〇年。以下、「前稿一」と呼称）、および、田中靖彦・石井仁「蕭常『續後漢書』昭烈皇帝紀についての覚書」（『實踐國文學』九九、二〇二一年。以下、「前稿二」

と呼称）においてすでに述べているので、ここでは繰り返さないが、本稿では、三国論の中でもとくに重要な位置を占める諸葛亮評價に論点を絞り、蕭常『續後漢書』諸葛亮傳の末尾にみえる贊の分析を通して、蕭常が諸葛亮をどのように評価しているかを論じ、ひいては南宋における三国論の論者間における影響関係について分析するものである。^①

一・諸葛亮評價に関わる箇所構成

蕭常『續後漢書』における諸葛亮の列傳は、卷第七上・列傳第三上、および卷第七下・列傳第三下に収録されている。同書において一人の人物の記録が上下分巻で扱われる

人物は劉備と諸葛亮のみであり、劉備に対する重視と同様、諸葛亮への重視の度合いの高さが窺える。

紀傳体の歴史書においては、人物（あるいはその一族）への総合的評価は、本紀や列傳などの各巻末において記される場合が多い。周知の通りその嚆矢は『史記』における「太史公曰」であるが、その後の正史でも「贊曰」「論曰」「史臣曰」などを巻末に設け、人物や一族に対する総合的評価を記すという方式が採られていることが多い。『三國志』では「評曰」がこれに該当する。そして蕭常『續後漢書』では、本紀・列傳・載記の巻末に「贊曰」が設けられており、蕭常の人物に対する評価を知る重要な手がかりとなっている。本稿の問題関心である蕭常の諸葛亮評価に着目した場合、諸葛亮傳の贊は巻第七下・列傳第三下の末尾に見える。

ところで、この諸葛亮傳は、「諸葛亮死去や諡号などに関する記事の直後から贊が始まる」という体裁になっていない。『續後漢書』の本紀・列傳・載記には、人物の生涯や事蹟を述べた後ただちに「贊曰」が始まる巻がある一方で、「贊曰」の前にも人物評価に関する文が挟まれる巻もあり、諸葛亮傳は後者に属する。諸葛亮傳において彼への評価を述べた部分は、「贊曰」の前の部分から既に始まっている。巻第七下の末尾の構成は、具体的には、諸葛亮死

去について言及した後、「死諸葛走生仲達」を経て、諸葛亮が定軍山に葬られたことが述べられ、彼に忠武侯と諡するという策書と、諸葛亮が生前に自らの死後や自身の財産について述べた上表が引用され、それに続けて「亮爲相十四年、纔兩赦」で始まる諸葛亮に対する評価について言及した比較的長文の部分（後掲【二】）があり、その後に諸葛均・諸葛喬らに関する記事があり（『三國志』とは異なり、諸葛瞻は別の巻に立傳されている）、そして最後に「贊曰」（後掲【二】）が見える、という構成になっている。本稿は【二】の贊を主な分析対象とするが、その前段に当たる【一】にも蕭常の諸葛亮評価を知る手がかりが少なからず含まれるため、これも併せて検証する。

二．贊の前の箇所について

まずは、【一】から見ていこう。なお、文中にある【一】「【A】」「【B】」「【C】」は、論の都合上筆者が附記したものである。

【一】

亮爲相十四年、纔兩赦^⑤。或言^⑥、「其惜赦者。」亮曰、「治世以大德、不以小惠。故匡衡^⑦・吳漢不願爲赦。先帝亦

言、『吾周旋陳元方・鄭康成間、每見啟告治亂之道悉矣、曾不語赦。』若劉景升・季玉父子、歲歲赦宥、何益於治。」不任喜怒、人無怨言、以公事廢李平・廖立、平聞亮薨、至發憤死、立亦垂涕歎曰、「吾終爲左袵矣。」【A】嘗作八務・七戒・六恐・五懼、皆有條章、以訓厲臣子。著作郎陳壽定著亮文集、凡二十四篇、又作八陣圖、蓋黃帝・太公丘井法也。⁽⁸⁾【B】長史張裔嘗稱之曰、「公賞不遺遠、罰不阿近、爵不可以無功取、刑不可以貴勢免。此賢愚所以僉忘其身也。」陳壽評之曰、「亮爲相國也、撫百姓示儀軌、約官職從權制、開誠心、布公道。盡忠竭力者、雖讐必賞。犯法怠慢者、雖親必罰。服罪輸情者、雖重必釋。游辭巧飾者、雖輕必戮。善無微而不賞、惡無纖而不貶。庶事精練、物理其本、循名責實、虛僞不齒。【C】刑政雖峻、而無怨者。以其用心平而勸戒明也。可謂識治之良才、管・蕭之亞匹矣。」壽又云、「應變將略、非其所長。」論者不以爲然。⁽¹⁾

【一】は、諸葛亮が滅多に恩赦をしなかったことを讃える論から始まっているが、これは『三國志』蜀書三・後主傳の評に注として引かれる『華陽國志』の記述を元にしていると思われる。この記事を劉禪を扱う帝紀である少帝紀ではなく諸葛亮傳において採録したことから、蕭常が劉

禪ではなく諸葛亮を実質的な国政の最高責任者と見なしていた（事実その通りだったのであるうが）ことが分かる。諸葛亮の死の報に触れた李平（李嚴）・廖立に関する記述は、『三國志』蜀書十の李嚴傳・廖立傳に、八務・七戒・六恐・五懼を作ったことは『三國志』蜀書五・諸葛亮傳（以下、『三國志』諸葛亮傳は卷数を省略して表記する）注『魏氏春秋』に見える。八陣圖を作成したことや、陳壽が諸葛亮の文集を編纂したことへの言及も、『三國志』諸葛亮傳を参照したものであろう。張裔による諸葛亮への讃辞も、『三國志』蜀書十一・張裔傳に見える張裔の諸葛亮評をほぼそのまま引用したものである。なお、この【一】には、陳壽による諸葛亮傳の評も「陳壽評之曰」「壽又云」と明記のうえ引用されているが見えるが、これは、蕭常『續後漢書』では他に例を見ない筆法である。⁽¹²⁾

ただし、ここで指摘しておかねばならないのは、ここに挙げた蕭常による諸葛亮評価の大略は、張枏（一一三三～一一八〇）の著作である『諸葛忠武侯傳』⁽¹³⁾の末尾にある「廣漢郡張枏曰」の前の段の記述をほぼ引用したものとなっている、ということである。既に見てきたように【一】の内容はほぼ『三國志』および同裴注を元として構成されているが、そういった史料の取捨選択はすでに張枏が『諸葛忠武侯傳』において行っているものであり、蕭常はさらにそれ

を孫引きした、というのが実態に近い（そのため、【一】については『諸葛忠武侯傳』との字句の異同に関する細かい校勘は行っていない）。先述した「陳壽による諸葛亮傳の評を『陳壽評之曰』『壽又云』と明記のうえ引用」という筆法も、張枋が元々行っている筆法に倣ったと見るべきである（ただし張枋の論では、蕭常が述べる「壽又云」に該当する箇所は無い。詳しくは後述）。さらに言うならば、先に、蕭常の著した諸葛亮傳の体裁が、「贊曰」の前に人物評價に関する比較的長文の記載を挟む体裁であることを指摘したが、これは陳壽『三國志』諸葛亮傳の構成を想起させる⁽¹⁴⁾と同時に、張枋『諸葛忠武侯傳』の構成でもある⁽¹⁵⁾。

こういった先人の文の丸写しという筆法は、現在の我々の価値観からするとあまり褒められたものではないと見ることもできるが、先人の文を丸写しするというのは前近代中国では非常によくあることでもあるし、「張枋の論に強く賛同した」という点こそが蕭常の史論であると理解することもできる。南宋代における三國論の普及や論者の影響力を窺い知ることの出来る実例と捉えることもできよう。

ただし、張枋の論と蕭常の論で異なる箇所もある。それが前述の引用箇所において【A】【B】【C】として示した箇所⁽¹⁶⁾で、このうち【A】と【B】は、張枋の論にはあるものを蕭常が省略した箇所である。【A】の箇所において張

枋は、諸葛亮の死後、彼を祭祀する廟の建立を願い出る動きがあり、劉禪は当初それを許可しなかったが、習隆らの上表に劉禪が従ったことを述べており（本論では引用を省略する）、これは『三國志』諸葛亮傳注『襄陽記』を元としたものとなっている。【B】の箇所では、諸葛亮が諸將の折り合いを付けるのに心を砕いたことが述べられている⁽¹⁶⁾。このうち【B】に関しては、これに該当すると読める記述が『續後漢書』の他の箇所（列傳第八など）に見えるので、重複を避けたと見て良いであろう。一方の【A】に関しては、該当する記述が『續後漢書』の他の箇所にも無い。諸葛亮祭祀および劉禪・諸葛亮の君臣関係に直結する内容であるだけに、これを採録しなかった蕭常には、何らかの意図があったのか、あるいは深い意味はないのか、という点は検討すべきであるが、現時点では明らかにし難いため、今後の課題としたい。

そして【C】であるが、張枋の論ではここで陳壽の評の引用を終え、「經載十二而年名不易、軍旅屢興而赦不妄下。袁曄稱之曰、『受六尺之孤、攝一國之政、事凡庸之君、專權而不失禮、行君事而國人不疑。』⁽¹⁸⁾樊建稱之曰、『聞惡必改而不矜過。賞罰之信、足感神明。』⁽¹⁹⁾と続けているが、蕭常はこの部分を採録していない。これらはいずれも『三國志』および裴注に出典が認められるものであり、論旨も【一】

や【二】で述べられるものと重複が見られる点も多いため、蕭常がこれを採録しなかったことにも特筆すべき意図があったわけではないと見て良い。

注目すべきは、『續後漢書』における【C】の箇所続きである。この「刑政雖峻」から始まる記述は張栻の論では見えず、蕭常自身の文章として注目しておきたい。まず「刑政雖峻、而無怨者。以其用心平而勸戒明也。可謂識治之良才、管・蕭之亞匹矣」は、張栻が省略した陳壽による諸葛亮傳評の続きである。張栻がこれを省略したのは、恐らく張栻が諸葛亮を管仲に比することを避けたためである（後述）が、蕭常はこれを敢えて引用した。このことは、後掲の「贊曰」における「諸葛亮は管仲・樂毅のような『功利的の域』にあるような人物ではない」という論旨と若干矛盾があるように思えるが、とくに大きな目的あつてのことではないであろう。あるいは、蕭常はあくまで陳壽の評を忠実に引用したかったのかもしれない。

続く「壽又云、『應變將略、非其所長。』論者不以爲然。」を見てみよう。蕭常は、諸葛亮の軍事的才能に対し陳壽が些か疑問を表明したことに言及した上で、それに対し「論者不以爲然」と述べている。ここでいう「論者」が誰のことか具体的には記されていないが、この「論者」には蕭常も含まれていると見るべきであろう。彼は、基本的には陳

壽や張栻の諸葛亮評価に同意であつた（というより丸写しに近い）が、諸葛亮の軍才に対する評価については、一言いいたかつたようである。無論、斯かる評価を行つた蕭常には、当時の南宋治下に生きる者として、北伐を敢行し続けた諸葛亮への敬慕と憧憬があつたであろうことは、想像に難くない。

これまで見てきた内容から分かるように、【一】の部分の内容は主に、陳壽を含めた蕭常に先行する人々の諸葛亮評価の紹介という側面が強い。就中、張栻から受けた影響力の大きさを見逃すことはできないであろう。張栻の影響力は、後掲の「贊曰」を読むとさらに明らかとなる。ただし、そういった先人の意見の紹介をすること自体が蕭常の諸葛亮評価の表れでもあり、また陳壽の評への疑問が呈せられている箇所もあるなど、蕭常の諸葛亮観を改めて確認できる内容となつている。

三．諸葛亮傳贊について

前述の通り蕭常は、【一】に続けて諸葛均・諸葛喬らに関して述べており（本稿では引用を割愛した）、「贊曰」はさらにその後から始まつている。具体的に見てみよう。な

お、本文の史料引用における段落わけは筆者が行ったものであり、また、文中にある「〔二〕」「〔D〕」および「〔E〕」は、論の都合上筆者が附記したものである。

【二】

贊曰、廣漢張枋有言、「三代衰、五伯起、而功利之說盈天下。謀國者不復知正義明道之爲貴。⁽²¹⁾亮當漢祚之季、乃能執其機而用之。其言曰、『漢賊不兩立、臣鞠躬盡力、死而後已。』⁽²²⁾嗚呼、此夏少康四十年經營宗祀、而卒以配天之本心也。若亮者、可謂有正大之體矣。觀其高臥隆中、不求聞達、蓋將終身焉。昭烈漢室之胄、而三顧之於草廬、名義既正、好賢之意又篤。安得不以身許之。故其君臣相與、一以道義而忘勢。受遺之際、肝膽相照、無纖芥形迹。何其盛也。亮之恢復規模、先爲根本計。方建興初、務農訓兵、以治國事。國事既定、北向致討、軍旅將發、拜表納忠、反復曲折、專以宮中府中之事爲言、且陳親賢臣遠小人之義、一篇之中、三致意焉。而其終章、尤爲切至、亮之意抑深且遠矣。即其行事而觀之、絕姑息之私意、本常禮之大公、見善若出諸己。⁽²³⁾用人各盡其才、至或有罪、雖素所禮遇、如馬謖、且流涕誅之而弗釋也。故李平・廖立雖被廢放、沒齒無怨言。蓋其於斯世、所欲不存焉。身爲將相

三十年間、家無贏餘、視天下無一足以動乎中者。其正大之體、爲如何哉。⁽²⁴⁾亮之奉嗣君、小心恭恪。一國之柄、舉出其手、而人不知其爲權。彼懷姦愆逆、竊竊窺人宗祀者、雨雪見睨、⁽²⁵⁾而謂亮敵哉。至使耕者雜渭濱、輿圖之復、已恢恢然在其目中矣。天不祚漢、妖星告變、⁽²⁶⁾謂之何哉。⁽²⁷⁾

或謂「亮勸昭烈取荊州爲不義。」而不知劉琮既降操、則荊州固魏之荊州矣。惜昭烈之失此機也。或又謂「魏延之策、恨其不用」、不知天將昌漢、攘除姦逆、直餘事耳、行險僥倖、非其志也。嗚呼、秦漢以來、士狃於戰國餘習、張子房號爲傑出者、而猶未免雜以伯術。若亮真「豪傑之士、無文王猶興」者、⁽²⁸⁾使得游於洙・泗、⁽²⁹⁾講學以終之、則其所至、又當若何。【D】傳稱、始亮在隆中、以管・樂自許。⁽³⁰⁾予謂、亮王者之佐、豈與管・樂同在功利之域者哉。意傳者之誤耳。⁽³¹⁾【E】

枋又言、「予讀出師表、見其所以告嗣君者、一本於正。⁽³²⁾殊非刻核陰謀之說。故於『手寫申・韓等書』、⁽³³⁾亦疑之。⁽³⁴⁾方亮之一見昭烈也、遂定取荊・益之計、⁽³⁵⁾時昭烈未有駐足之地、歷觀諸國、獨劉氏不能守荊・益、是誠天所資也。若昭烈以荊・益無忘討賊、夫誰敢不服。惜其徇小不忍而妨大計、故劉琮可取而不取。則亮之策、昭烈猶有不能盡從者也。及狼狽而遁、雖藉吳之力、敗

操赤壁、然終迫於吳、乃始入蜀、以譎計取之。予知亮於此、蓋亦有不得已焉耳、非草廬所以告昭烈之本意也。嗟呼、五伯以來、功利之說盈天下。如有亮堅守其正、不以利鈍、易不共戴天之心、庶其可以言王道者。

雖然、亮之於學爲未足、故知有所未至也。知有未至、則心有未盡。未能盡其心、則於天下之事、不能偏該而一貫之也。⁽⁵⁷⁾開國建后、大事也。而奉策所立者、乃亡國之宗婦。⁽⁵⁸⁾以日易月、後世之大失也。⁽⁵⁹⁾而冢宰所贊、乃固謬之禮。⁽⁶⁰⁾且未踰年而改元。⁽⁶¹⁾此有以見其學之未至歟。⁽⁶²⁾嗟乎、若亮者、體正大而能充之以學、吾必謂之三王之佐矣。栻、篤論君子也、其言云爾。⁽⁶³⁾

内容を一見して明らかなことは、この贊は非常な長文であるということである。『續後漢書』の他の贊と比較したとき、たとえば、劉備を扱う本紀第一の贊はおよそ百四十字、孫堅・孫策・孫權を扱う吳載記第一の贊はおよそ二百五十字、曹操・曹丕・曹叅・曹芳・曹髦・曹奐を扱う魏載記第一の贊はおよそ三百二十字であるのに対し、諸葛亮を扱う列傳第三下の贊は、何とおよそ九百六十字となっており、分量の違いは明らかである。⁽⁷⁰⁾もちろん、文字数の多寡がそのまま蕭常の重視の度合いの反映であるというわけではないが、それでもこの文字数の差は、蕭常の諸葛亮

に対する思い入れの強さがある程度は反映していると解釈して良いであろう。⁽⁷¹⁾

ところがこの贊は、かなりの長文であるにも関わらず、蕭常独自の論は、ほぼ無い。【一】が張栻『諸葛忠武侯傳』の影響を大きく受けていることを先に論じたが、この贊も同じく『諸葛忠武侯傳』の卷末にある「廣漢郡張栻曰」で始まる部分のほぼ丸写しなのである。そして蕭常自身、贊の書き出しに「廣漢張栻有言」と明記しており、張栻の論を引用していることを隠していない。言ってしまえば、これだけ長い贊を書いた蕭常の諸葛亮への評価の大意は、「張栻の言う通り」というもの、ということになる。

なお、蕭常の著した諸葛亮傳贊は、『諸葛忠武侯傳』からの引用が大部分であることは確かだが、一字一句違わぬ忠実な引用というわけではなく、細かい表現の異同が多数あるうえに、大幅な省略もある。この大幅な省略については後述する（細かい省略については論及を割愛した）。本論攷は蕭常の史観を研究することを主目的としたものであるので、ここであくまで蕭常『續後漢書』諸葛亮傳の贊を主たる分析対象とし、張栻の著作は参考とするに留めておく。

論の内容を見ていこう。第一段落は、天下に功利の説が満ち、国の利益のために策を巡らす者たちがもはや正義明

道の貴さを知らぬ中で、諸葛亮こそは「正大の體を有する者である、と絶賛することから始まる。そして劉備との麗しき信頼関係、北伐を巡る政策、出師の表に看取できる忠義、公正無私な姿勢などに対する讃辞へと続き、領土回復はすでに視界の中にあつたものの、天は漢に福を下さず妖星が変を告げてしまった（諸葛亮は陣没した）、と論じている。全面的な諸葛亮讃美であると見て良い。

第二段落では、諸葛亮に対する否定的評価に言及したうえで、それに対する反論が述べられる。張枋によれば、諸葛亮が劉備に対し、劉琮の荊州を奪うように勧めたことは不義ではなく、むしろ劉備がその策を採用しなかったことが惜しまれるという。また、魏延の長安急襲策を諸葛亮が採用しなかったことについても諸葛亮を庇っている。そして、諸葛亮こそまさに孟子の言う「豪傑の士」であると絶賛し、もし諸葛亮が洙・泗（儒学の門）に遊学して学びを終えていれば、どこまで至ることができたであろうかと論じている。さらに、諸葛亮は管仲・樂毅のような「功利の域」にあるような人物ではないから、諸葛亮が自らを管仲・樂毅に比したというのは誤りであろうと言っている。

蕭常は第三段落において改めて「枋又言」と述べ、張枋の論の引用を更に続ける。「出師の表を読むと、諸葛亮の劉禪へ告げていることはすべて正に基づいている。だから、

『諸葛亮が（劉禪らに読ませるために）申不害・韓非などの書を手づから書した』などというのは疑わしい」とし、また、諸葛亮が初めて会った劉備に対し荊州・益州を取るように勧めたことを再度庇っている。張枋によれば、「昭烈が荊州・益州を以て賊の討伐を忘れることがなければ、服せぬ者などいようか。惜しむらくは、攻め取ることができた劉琮を取らなかつたことである。諸葛亮の策も、昭烈はその総てに従つたわけではないのである」といい、「（劉琮から荊州を奪わなかつたばかりに、）狼狽して曹操から遁走し、呉の力を借りて赤壁では勝つたものの、呉に迫られてやつと入蜀し、だまし討ちによつて益州を奪うことになった。諸葛亮もここにおいては、（詐術を用いたのは）やむを得ないものがあつたのであり、（かかるとだまし討ちは）草廬において劉備に告げた当初の本意ではなかつたのである」という。張枋は、「諸葛亮は本来は法家のような酷薄さや詐謀奇計を用いるような人間ではなく、益州を騙し討ちしたのは、当初の諸葛亮のプランに従わなかつた劉備に責任がある」と述べているのである。

ここまでは諸葛亮を絶賛し、ひいては廻護する論であったが、第四段落で論調は大きく変わる。張枋は、諸葛亮の學には足らざるものがあり、ゆえに知にも至らざるものがあり、心を尽くすことができず、そのため天下の事も遍く

通じることができなかったのだという。第二段落に出て来た「使得游於洙・泗、講學以終之」という記述とあわせて考えれば、ここでいう「學」とは儒学のことであろう。張枋によれば、諸葛亮には儒学的な素養が足りなかったのである。その実例として張枋は、吳懿の妹の立后のために策書を奉じたこと、劉備の「服喪に関しては前漢文帝の故事に従うように」という遺言に賛同したこと、踰年せず改元したことの三点を挙げて批判する。未踰年改元への批判は早くも陳壽が『三國志』蜀書三・後主傳の「評曰」にて述べており、吳懿の妹を劉備が妻としたことは習鑿齒も手厳しく批判しているが（『三國志』蜀書四・二主妃子傳注の裴松之注）、服喪に関する批判は『三國志』などには見られないものである。この三点はいずれも、宋代士大夫の禮への重視ぶりが窺える論であると理解できるであろう。なお、注（64）でも指摘したように、本論が参照した『諸葛忠武侯傳』では踰年せず改元したことへの批判は見えないので、これは張枋が批判しなかった論点を蕭常が加筆したものと看做すことができるかもしれない。いずれにせよ、張枋（そして蕭常）は、全体的には諸葛亮を高く評価したかったが、宋代士大夫の価値観に基づいた場合、益州奪取を献策したことは不義ではないと弁護する余地があったものの、（当時の儒教的な価値観において）人倫を乱すとさ

れた行為に対しては弁護のしようがないと考えていたことが分かる。

そして、張枋の論の引用を終えた蕭常は、かような論を展開した張枋を讀みて、贊を終えている。蕭常の諸葛亮評價に對し、張枋がいかに大きな影響を与えたかが実感でき余りある史料である。劉備の婚姻に對する批判は、列傳一・后妃諸王傳の贊でも展開されている（詳細は別稿を準備中である）。后妃諸王傳の贊は諸葛亮傳贊とは異なり先人の論の引き写しとはなっていないが、張枋の蕭常に對する影響を鑑みるに、后妃諸王傳の贊で展開される劉備の婚姻への批判も、張枋の論の影響を受けてのものと見るべきであろう。張枋と同郷人でもない蕭常が、ここまで張枋の論を讀み、その影響を強く受けている理由の検討は今後の課題としたいが、純粹に張枋の論の内容に賛同しただけである可能性は低くないように思われる。

四・蕭常が採録しなかった箇所について

これまでに確認したように、諸葛亮傳の贊はほぼ張枋の論の丸写しであるが、張枋の論のうちに蕭常が引用を省略した箇所もあることには留意しておきたい。先の引用における【D】【E】は、こういった省略のうちに比較的長文

の省略がある箇所を示す。

(一) 正統論への関心

蕭常が割愛した部分【D】は、張枋の論では以下のようになっている。

【D】

予每恨陳壽私且陋。凡侯經略次第、與夫燭微消息、治國用人、馭軍行師之要、悉闕而不章。幸雜見於他傳及裴松之所注、因衷而集之、不敢飾辭以忘其實。其妄載非實者、則刪之。庶幾讀者可以得侯之心。近世鉅公作史書編年、乃以魏年號接漢獻之統。故其所書、名不正而言不順。⁽⁷⁷⁾予謂、獻帝雖廢、而昭烈以正義立於蜀、武侯輔之、漢統未墜地也。要盡後主末年、始係魏年號爲正始。⁽⁷⁸⁾

【D】の前半では、陳壽の著述に対する不満と、その不備を補ったこと、ただし事実ではない記録は削除したことが述べられる。そして後半では、「鉅公」が著述した編年体の史書が、後漢獻帝の後の年号に魏の年号を用いていることを、『論語』の表現を用いて厳しく批判し、「獻帝が廢

されたとはいえ、劉備が蜀において正義によって即位し、諸葛亮がこれを輔佐しているのだから、漢の系譜はいまだ喪失していない。劉禪の末年が終わってから魏の年号につなげるべきだ」と言っている。「近世鉅公作史書編年」とは、司馬光の『資治通鑑』のことを指すと見て間違いあるまい。張枋の論は、蜀漢滅亡後は魏の年号の使用を認めている点において、かつての習鑿齒の主張や朱熹の『資治通鑑綱目』の筆法よりは若干魏に厳しくない主張であることが興味深い、これに関する考察は別稿の課題としたい。

この【D】後半は、いわゆる三国正統論と呼ぶべきものに直結する論点であるだけに、これを蕭常が引用していないことは大きな意味があるようにも見えるが、そうではない。というのは、これに該当する部分は、『續後漢書』年表第二・章武以來吳魏表の末尾に「廣漢張枋之論亦謂」として引用されているからである。諸葛亮傳贊においてこの部分の引用を割愛した理由は、既に別の箇所で見引用済みであるからに過ぎないのであり、やはりこの論点は蕭常にとっても並々ならぬ関心事だったことは間違いない。

(二) 蕭常と朱熹

続いて【E】の箇所の省略された部分を見ておこう。

【E】

予既作侯傳以示新安朱元晦、元晦以予不當不載以管・樂自許事、謂「侯爲後主寫申・韓・管子・六韜之書。及勸昭烈取荊・益、以成伯業、可見、其所學未免乎駁雜。」其說亦美矣。而予意有未盡者。侯之所不足者、學也。予固謂、使侯得游於洙・泗之門、講學以終之、則所至又非予所知、不無深意矣。然侯胸中所存、誠非三代以下人物可睥睨。豈管・樂之流哉。時有萬變、而事有大綱。大綱正、則其變可得而理。方曹氏篡竊之際、孰爲天下之大綱乎、其惟誅賊以復漢室而已。侯既以身從帝室之英胄、不顧強弱之勢、允執此綱、終始不渝。管・樂其能識之乎。使侯當齊桓之時、必能率天下、明尊王之義、協相王室、期復西周。其肯務自富其國而忘天下之大訓乎。使侯當燕昭之時、必能正名定國、撫其民人、爲天吏而討有罪以一天下之心。其肯趨一時之近効、志在土地珍寶而自以爲「功莫大乎是」。其心度與侯絕相遼邈。故不欲書以惑觀聽、拔本塞源之意也。^④

【E】において目を引く点は、朱熹が登場していることである。これによると、張栻は作成した『諸葛忠武侯傳』を朱熹に見せたところ、朱熹は、諸葛亮が自らを管仲・樂毅に比したことも載せるべきであると述べ、諸葛亮が劉禪

のために申不害・韓非などの書を手書したことや、劉備に荊州・益州を取るよう勧めたことを挙げて、「諸葛亮の学んだところも駁雜たるを免れていないことが分かる」と言っている。張栻はこれに一定の理解を示しつつも全面肯定はせず、「侯（＝諸葛亮）に足りないものは、學である。もし諸葛亮が洙・泗の門で学び終えていれば……」という、先程と同様の論を再度展開する。そして張栻は、諸葛亮は管仲・樂毅のような類の人ではなく、「諸葛亮が自らを管仲・樂毅に比した」と書すことで人々を混乱させたくはない、と言っている。実際、張栻の『諸葛忠武侯傳』では、これに関する記事は見えない（この記事を省略したと述べているこの部分は除く）。

本史料は、張栻と朱熹が諸葛亮評価をめぐって議論したことを伝える史料として非常に興味深い、斯かる点についての検討は今後の課題とし、ここでは蕭常の史論という観点から見ておきたい。この史料から確認できることは、蕭常は朱熹による諸葛亮評価について知っていた可能性があるとすることである。蕭常が目にした張栻の著述が現在伝わっているものと同内容であった場合、そこから長文の引用を行っている蕭常は、ここに見える朱熹と張栻の間答についても読んだはずであり、畢竟、朱熹が張栻の諸葛亮評価に対し意見したことも知っていたことになる。

だが蕭常は、この朱熹と張栻のやりとりは採録しなかった。その原因は普通に考えれば、この部分は採録の必要が無いと判断したからであろう。この段における朱熹の出發は微々たるものであるし、しかも朱熹の論を張栻は斥けている。蕭常としては、かかる朱熹の登場する箇所を採録する必要を感じなかったというのが妥当な解釈であろう。また【E】において張栻は再度「諸葛亮に足りぬのは學であり、もし彼が洙・泗の門で学び終えていれば」ということを述べている。先に見たように、これも既に述べられていることであるので、蕭常としては重複であると判断したのであろう。換言すれば、省略された【E】は、蕭常にとって見るべき点の無い朱熹の意見や、引用済みである張栻の論が繰り返して述べられている箇所であることになる。この部分を蕭常が引用しなかったことも、別段不思議とするには当たらない。

ただし、蕭常が目にした張栻の著述では、そもそも朱熹と張栻のやりとりに関する言及が無かった可能性も考慮せねばなるまい。高畑常信「張南軒集の版本」(『中央大学文学部紀要』一〇—三、一九七六年。本論では高畑常信編『張南軒集人名索引』采華書林、一九七六年所収版を参照した)によると、張南軒の文集は朱熹の編によるものの他に、南軒の早年の説である未定の論が多い「別本」(黃州官本)

が流伝していたが、現在は伝わっていないという。となれば、当時において『諸葛忠武侯傳』も複数種類の版本が流布していた可能性も捨てきれない。【E】の冒頭で張栻は「予既作侯傳以示新安朱元晦」と述べ、それに続けて自己の説を展開している。この記述からは、二つの可能性が考え得るであろう。一つめの可能性は、張栻は「侯傳」すなわち『諸葛忠武侯傳』をひとまず書き上げたが、成書の前に朱熹に見せ、彼の意見を踏まえた【E】の部分を加えて完成稿とした、というもの。二つめの可能性は、すでに成書済みであった同著を朱熹に見せたところ意見を受けたので、それを踏まえて後日【E】に当たる論を加筆した、というものである。前者の場合、流伝した『諸葛忠武侯傳』は【E】の部分を含んだもののしか無かったことになるが、後者の場合、【E】の部分を加筆する前の『諸葛忠武侯傳』も当時において何らかの理由により出回った可能性もある。つまり、蕭常は【E】に該当する部分の無い『諸葛忠武侯傳』(あるいはそれに類する張栻の著述)を参照した可能性もあるものであり、その場合、彼が【E】の部分を自著で引用しなかった理由は、単純に「元々無かったから」ということになろう。もちろん、蕭常の閲覧した張栻の著述に【E】の部分が含まれていた可能性も決して低いわけではなく、この場合は前述の通り、蕭常は朱熹の登場する【E】を読ん

だ上で敢えて採録しなかったことになる。つまり、諸葛亮評価をめぐる朱熹と張栻のやりとりについて、蕭常が知っていた可能性と、知らなかった可能性、そのいずれも否定し難い。

ただしいずれにせよ、張栻が諸葛亮を評価するに当たって、全面的に依拠したのが朱熹ではなく張栻であったことは確かであった。前稿一で述べたように、蕭常は朱熹とほぼ同時代の人であると思われるが、朱熹（一一三〇―一二〇〇）と張栻（一一三三―一一八〇）もまたほぼ同時代人であるから、張栻・朱熹・蕭常の三人は同時代人であることになる。蕭常が朱熹の著述を読んでいたかは今後慎重に検討すべき重要課題であるが、蕭常が同時代人である張栻の著述を読んでいる以上、同じく同時代人である朱熹の著述を読んでも不思議ではあるまい。また前述したように、蕭常は『諸葛忠武侯傳』を通して朱熹の諸葛亮評価について知っていた可能性もある。だが今回検証したように、少なくとも諸葛亮評価に関して言えば、蕭常が優れた見識の持ち主として名を挙げているのは張栻であり、朱熹に対する言及は一切無い。このことは、当時における三国論の論者としての朱熹や張栻の知名度・影響力を考察する一つの手がかりであると言えよう。

おわりに

蕭常『續後漢書』諸葛亮傳の贊およびその前段を主な検討対象として、蕭常の諸葛亮評価について検証してきた。蕭常の諸葛亮に対する評価は概ね好意的かつ高評価であり、この点において蕭常の三国論もまた、南宋代における蜀漢への肯定的言説の一環として捉えて問題ないことは確かである。ただし諸葛亮に対する評価は絶賛のみで終わっておらず、劉備の立后、劉備への服喪などに関する諸葛亮の姿勢に対しては、宋代士大夫の価値観に基づいた手厳しい批判も加えているのが興味深い。

ただし、斯かる蕭常の諸葛亮評価の大きな特徴として確認しておかねばならないのは、それが張栻の論の強い影響下にあり、蕭常独自の論はほぼ無い、ということである。本論で検証したように、諸葛亮傳に見える諸葛亮への評価は、張栻『諸葛忠武侯傳』における諸葛亮評価のほぼ丸写しとなっており、しかも贊に関しては、それが張栻の論の引用であることを蕭常自身が明記している。そしてその一方で蕭常は、張栻と諸葛亮評価について議論を交わしたはずの朱熹の名は挙げていない。これらのことは、南宋における諸葛亮評価や三国論における張栻・朱熹といった思想家たちの影響力を考える上でも、重要な示唆を与えてくれ

ている。

《注》

(1) 本稿における『續後漢書』のテキストは、叢書集成初編の『續後漢書』（本稿では「叢書集成本」と呼称）を底本とし、「四庫全書・史部・別史類所収の『蕭氏續後漢書』（本稿では「四庫全書本」と呼称）、および、同治八年重刊と記載のある『續後漢書』の版本（本稿では「傳・同治本」と呼称）を用いて校訂を行った。叢書集成本、四庫全書本、および傳・同治本について、およびテキスト校訂に関する凡例などは、前稿一および二を参照。

(2) 叢書集成本および傳・同治本による。前稿一で述べたように、上下で構成されている巻については、叢書集成本、傳・同治本と四庫全書本とは異同がある（本稿では巻数の表記は前者に従う）。前者では、昭烈皇帝紀（卷第一上・帝紀第一上と卷第一下・帝紀第一下）と諸葛亮傳が上下構成となっていることに加え、吳載記第十一も上下構成となっている（卷第三十三上・吳載記第十一上と、卷第三十三下・吳載記第十一下）。ただし吳載記第十一は、上において虞翻・張温・韋昭らを、下において趙咨・沈珩らを扱っており、一人の人物に関する記録を上下分巻として扱っているわけではない。そして、四庫全書本では、

劉備を扱う昭烈皇帝紀は卷一・帝紀一で、上下に分かれていない。また四庫全書本では吳載記十一も上下に分ける体裁とはなっておらず、虞翻・張温・韋昭らを扱っているのは吳載記第十一、趙咨・沈珩らを扱っているのは吳載記第十二となっている。つまり四庫全書本では、上下分巻で一人の人物を扱っているのは諸葛亮のみということになる。附言すると、諸葛亮傳にも附傳として諸葛喬傳があり、厳密にいえば「諸葛亮ひとりで上下巻」ではないともいえるが、諸葛喬の扱いは卷七下の終盤にくく僅か記述が割かれているに過ぎず、諸葛亮単独で上下巻の扱いになっていると見て大過ない。

(3) これには例外もあり、『史記』は、卷二十三・禮書、卷二十五・律書、卷三十五・管蔡世家、卷一百十九・循吏列傳、卷一百三十・太史公自序などのように「太史公曰」が複数ある巻や、卷十五・六國表などのように「太史公曰」が無い巻もある。ただし『史記』の本紀・世家・列傳では多くの場合、巻末に「太史公曰」として、人物や一族に対する総合的な評価を下す傾向があると言って良いであろう。

(4) 列傳一のように「贊曰」が巻末ではなく巻の途中にある場合や、列傳八、列傳十、列傳十四、吳載記一、魏載記一などのように「贊曰」が一卷の中に複数ある場合もある。

(5) 四庫全書本は「才」につくる。

(6) 四庫全書本は「大」につくる。

(7) 四庫全書本は「康」につくる。「匡」は宋の太祖趙匡胤の諱で使用される字であり、宋代には使用できなかった。陳垣『史諱舉例』（科學出版社、一九五八年）によると、宋代には「匡」は正・輔・規・糾・光・康などに改められたという。これを踏まえれば、少なくともこの記述に関して言えば、四庫全書本の記述は宋代の避諱が行われ、一方で叢書集成本などでは宋代の避諱が行われていないことになる。

(8) 『李衛公問對』卷上に、「丘井之法」についての言及がある。同記述に見える李靖の返答によると、「丘井之法」は黃帝の創始したもので、その後継者といえるのが周初の太公望である、という。「蓋黃帝・太公丘井法也」という表現は、この『李衛公問對』の記述か、あるいはそれに類する概念を踏まえたものであろう。

(9) 叢書集成本、傳・同治本、四庫全書本のいずれも「遠」につくるが、『三國志』蜀書十一・張裔傳に従い「遺」に改める。

(10) 四庫全書本は「益時」につくる。本稿では叢書集成本および傳・同治本の「竭力」のままとするが、百衲本『三國志』の該当箇所は「益時」となっていることも附記し

ておく。

(11) 亮 相爲ること十四年、纔かに兩^{ふた}び赦すのみ。或ひと言ふならく、「其れ赦を惜しむ者なり」と。亮曰く、「治世は大德を以てし、小惠を以てせず。故に匡衡・吳漢 赦を爲すを願はず。先帝も亦た言ふ、「吾 陳元方・鄭康成の間を周旋し、毎に啟告せられ、治亂の道 悉なるも、曾て赦を語らず」と。劉景升・季玉父子の若きは、歳歳赦宥するも、何ぞ治に益せん」と。喜怒に任せず、人に怨言無し。公事を以て李平・廖立を廢するも、平は亮の薨ずるを聞くや、憤を發して死するに至り、立も亦た垂涕して歎じて曰く、「吾 終に左衽と爲らん」と。嘗て八務・七戒・六恐・五懼を作り、皆 條章有り、以て臣子を訓厲す。著作郎の陳壽 亮の文集を定著すること、凡て二十四篇。又 八陣圖を作る。蓋し黃帝・太公の丘井法なり。長史の張裔 嘗て之を稱して曰く、「公 賞は遠きを遺さず、罰は近きに阿らず、爵は功無きを以て取る可からず、刑は貴勢なるを以て免るる可からず。此れ賢愚の僉 其の身を忘るる所以なり」と。陳壽 之を評して曰く、「亮の國に相爲るや、百姓を撫して儀軌を示し、官職を約めて權制に従ひ、誠心を開き、公道を布く。忠を盡くし力を竭くす者は、讐と雖も必ず賞す。法を犯し怠慢なる者は、親なりと雖も必ず罰す。罪に服し情を

輸す者は、重しと雖も必ず釋す。辭を遊ばしめて巧みに飾る者は、輕しと雖も必ず戮す。善は微として賞せざるは無く、惡は織として貶さざる無し。庶事 精練し、物は其の本を理め、名に循ひて實を責め、虚偽をば齒せず。刑政 峻なりと雖も、而れども怨む者無し。其の心を用ふることに平らかにして勸戒すること明らかなるを以てなり。治を識るの良才、管・蕭の亞匹と謂ふ可し」と。壽又云ふ、「應變の將略は、其の長ずる所に非ず」と。論者 以て然りと爲さず。

(12) たとえば、卷第二・少帝（劉禪）紀の贊は、陳壽の評とかなり類似した内容が述べられているにも関わらず、「陳壽評之曰」に当たる表現はなく、あたかも蕭常独自の見解であるかのように読める筆法となっている。これについての詳細は別稿を意中である。

(13) 本論では、『諸葛忠武侯傳』は、『漢丞相諸葛忠武侯傳』（張枋撰、全一卷、四部叢刊續編、商務印書館、一九三四年、一九八四年に上海書店が重印）を底本とした。なお、この四部叢刊續編本は卷末の「校勘記」で少なからず誤植が指摘されている。

(14) 『三國志』の本紀や列傳は、人物の事蹟（および一族や関係者の附傳）の記述のあと直ちに「評曰」へと続く巻と、「評曰」の前に人物評価などに関する記載を挟んでいる

卷とがあり、諸葛亮傳は後者に当たる。『三國志』諸葛亮傳では、諸葛亮の死亡記事および死後の出来事を記したあと、「諸葛氏集」目録、および同集を奉った際の上表文が収録されており、さらにそれに続けて諸葛喬・諸葛瞻らの附傳があり、その後が「評曰」という構成になっている。この陳壽の上表文の本身は、諸葛亮に対する人物評価を多分に含んでおり、陳壽は「評曰」の前にも長文の諸葛亮への賞賛を盛り込んでいることになる。

(15) 張枋『諸葛忠武侯傳』は、諸葛亮に関する事蹟を述べたあと、彼に対する先人の評価などを挙げた上で、最後に「廣漢郡張枋曰」で始まる長文の諸葛亮評価を述べている。

(16) 紙幅の都合で引用は省略するが、張枋は、黃忠を關羽と同列に扱えば關羽が怒るであろうと劉備に助言したことや、魏延と楊儀が諸葛亮生前はよく命令に服したが、その死後は互いに殺し合ったことを具体例としてあげている。これは『三國志』蜀書六・黃忠傳、蜀書十・魏延傳・楊儀傳などの記述を参照したものと思われる。

(17) 『三國志』蜀書三・後主傳の評を典拠とした表現。

(18) 『三國志』諸葛亮傳に「袁子曰」として引かれる裴注を典拠とした表現。

(19) 『三國志』諸葛亮傳注『漢晉春秋』を典拠とした表現。

(20) 蕭常『續後漢書』諸葛亮傳贊の校勘は、前述した叢書集成本、傳・同治本、四庫全書本による校勘に加えて、本

論中で述べている理由により、張枋『諸葛忠武侯傳』も校勘の参照に用いた。ただし、蕭常の諸葛亮傳贊と『諸葛忠武侯傳』とは、大意は同じながら細かい表現の異同は相当多いため、本論では必要に応じた参照・校勘に留め、細かい異同の指摘は行わない。張枋『諸葛忠武侯傳』と蕭常の諸葛亮傳贊の異同のうち特記しておくべきものとしては、本論で言及している大幅な省略の他に、張枋が諸葛亮を「侯」と呼称している箇所を蕭常は「亮」としている点が挙げられる。ちなみに、張枋『諸葛忠武侯傳』が諸葛亮を「侯」と呼称するのは卷末の「廣漢郡張枋曰」からであり、それ以前の箇所では張枋も「亮」と呼称している。

(21) 『諸葛忠武侯傳』ではここに「三老・董公獨得宏綱、以告漢高帝。惜高帝未能盡其用也。」が入る。

(22) 『三國志』諸葛亮傳注『漢晉春秋』に引用される諸葛亮の上表、いわゆる「後出師表」に見える表現を指すものであろう。

(23) 夏王朝が一度は臣下に実権を奪われたが、四十年を経て実権を王が再度掌握したことをいう。少康は、夏王朝の王。少康の即位について『史記』卷二・夏本紀には「帝

相崩、子帝少康立」としか記録が見えないが、『史記索隱』や『史記正義』の紹介する少康即位にまつわる逸話を総合すると、夏王朝の実権は后羿に奪われ、さらに后羿を殺した寒浞とその子は帝相を滅ぼしたが、夏の遺臣であった靡らが寒浞らを討ち、帝相の子であった少康を即位させたのだという。本文に見える「四十年」という表現の典拠は、『史記正義』の「按、帝相被篡、歷(后)羿・〔寒〕浞二世、四十年。而此紀不説、亦馬遷所爲疏略也」という記述であろう(傍線、亀甲括弧および亀甲括弧内の文字は筆者が補ったものである)。

(24) 「觀其」は『諸葛忠武侯傳』では「自幼讀書、獨觀大畧、晨夜從容、抱膝長嘯、其胸中所見、豈淺識所能窺哉。」につくる。

(25) 叢書集成本は「昭」につくるが、傳・同治本、四庫全書本、および『諸葛忠武侯傳』に従い「照」に改める。

(26) 『諸葛忠武侯傳』ではここに「拳拳之心、實在後主。」が入る。

(27) 『三國志』諸葛亮傳に見える上表文(いわゆる「出師表」)にある「親賢臣、遠小人、此先漢所以興隆也。親小人、遠賢臣、此後漢所以傾頽也」を指す。

(28) 「禮」は、『諸葛忠武侯傳』では「理」につくる。

(29) 「人の善い点を見ると、我が身から出たことのように喜

ぶ」の意。類似表現として、『後漢書』列傳六十・孔融傳に「融聞人之善、若出諸已」とある。

(30)『諸葛忠武侯傳』ではここに「娶婦沔南、惟賢是取、人之訕笑、不復顧也。」が入る。

(31)「爲」は、四庫全書本および『諸葛忠武侯傳』では「都」につくる。

(32)「爲如何哉」は、『諸葛忠武侯傳』では「豈不具哉」につくる。

(33)「竊竊」は、四庫全書本は「切切」につくる。

(34)「雨雪見睨」は、『詩經』小雅・魚藻之什・角弓を典拠とした表現。『詩經』角弓に「雨雪濛濛、見睨曰消、(中略)雨雪浮浮、見睨曰流」(雪 雨ること濛濛たれども、睨を見れば日に消ゆ、(中略)雪 雨る浮浮たれども、睨を見れば日に流る)とある。雪が盛んに降っても、日の光にあたれば消えてしまい、溶けて流れる。小人の勢いが盛んでも、君子が美道を以て教えれば小人の跋扈もやむであろう、の意。(高田眞治『漢詩大系 詩經 下』集英社、一九六八年を参照)。なお、「睨」は、四庫全書本は「睹」につくるが、これは誤りであろう。

(35)四庫全書本および『諸葛忠武侯傳』では、「雜」の後ろに「於」が入る。

(36)『三國志』諸葛亮傳に注として引かれる『晉陽秋』の「有

星赤而芒角、自東北西南流、投于亮營、三投再還、往大還小。」のことを指すか。ただし張枋「諸葛忠武侯傳」および蕭常『續後漢書』諸葛亮傳ではこれに該当する記事は採録されず、『續後漢書』諸葛亮傳では「有星隕於營中。亮薨、年五十四」とのみ見える。

(37)「天不祚漢、妖星告變、謂之何哉」は、『諸葛忠武侯傳』では「不幸薨謝、匪大數然歟」。

(38)「攘」は四庫全書本では「掃」。

(39)「孟子」盡心章句上に「孟子曰、待文王而後興者、凡民也。若夫豪傑之士、雖無文王猶興」とあるのを踏まえている。

(40)洙水と泗水。『禮記』檀弓上に、曾子の子夏への言葉として「吾與女事夫子於洙泗之間」とあるのが見える。「洙泗」とは孔子が弟子を教えた地を指す語であり、後には孔子・儒家・儒学などを指す語ともなった。なお、「洙泗」は『諸葛忠武侯傳』では「洙泗之門」。

(41)『三國志』諸葛亮傳にある「毎自比於管仲・樂毅」のことを指すと思われる。

(42)「亮王者之佐」は、『諸葛忠武侯傳』では「侯蓋師慕王者之佐、其步趨則然」。

(43)『諸葛忠武侯傳』ではここに「故不復云。」が入る。

(44)贊に曰く、廣漢の張枋に言有り、「三代衰へ、五伯起り、而して功利の説 天下に盈ち、國を謀る者 復た正義明

道の貴爲るを知らず。亮 漢祚の季に當たるや、乃ち能く其の機を執りて之を用ふ。其の言に曰く、『漢と賊とは兩立せず、臣 鞠躬盡力し、死して後 已まん』と。嗚呼、此れ夏の少康 四十年にして宗祀を經營し、而して卒に以て天に配するの本心なり。亮の若き者は、正大の體を有すと謂ふ可し。其の隆中に高臥し、聞達を求めざるを觀るに、蓋し將に身を終えんとするなり。昭烈は漢室の胄にして、而も三たび之を草廬に顧みる。名義既に正にして、賢を好むの意 又た篤し。安んぞ身を以て之を許さざるを得んや。故に其の君臣 相與するや、一に道義を以てして勢を忘る。遺を受くるの際、肝膽相照らし、纖芥の形迹も無し。何ぞ其れ盛んなるや。亮の恢復の規模は、先づ根本の計を爲す。方に建興の初め、農に務め兵を訓へ、以て國事を治む。國事 既に定まるや、北に向かひて討つを致し、軍旅 將に發せんとするや、表を拜して忠を納め、反復曲折して、専ら宮中・府中の事を以て言と爲し、且つ賢臣に親しみ小人を遠ざくる義を陳べ、一篇の中に、三たび意を致す。而して其の章を終るに、尤も切至爲りて、亮の意 抑々深く且つ遠し。其の行事に即きて之を觀るに、姑息の私意を絶ち、常禮の大公に本づき、善を見れば諸を已より出すが若し。人を用ふるや各々其の才を盡くさしめ、或ひと罪有るに

至るや、素より禮遇する所と雖も、馬謖の如きは、且く流涕するも之を誅して釋さざるなり。故に李平・廖立廢放せらるると雖も、没齒まで怨言無し。蓋し其の斯の世に於けるや、欲する所 存せず。身は將相爲ること三十年間なるも、家に贏餘無く、天下を視るに一の以て中を動かすに足る者無し。其の正大の體、如何爲るかな。亮の嗣君を奉ずるや、小心恭恪たり。一國の柄、擧げて其の手より出づるも、而れども人は其の權爲るを知らず。彼の姦を懷き逆を稔み、竊竊かに人の宗祀を窺ふ者、雪雨るも明を見れば、亮と敵せんかな。耕者をして渭濱に雜はらしむるに至りては、輿圖の復は、已に恢恢然として其の目中に在り。天 漢に祚せず、妖星 變を告ぐるは、之を謂何せん。

或ひと謂ふ、『亮の昭烈に荊州を取るを勸むるは不義爲り』と。而れども劉琮 既に操に降りたれば、則ち荊州は固より魏の荊州なるを知らざるなり。昭烈の此の機を失するを惜しむなり。或ひと又た、『魏延の策、其の用ゐられざるを恨む』と謂ふは、天の將に漢を昌んにせんとするに、姦逆を攘除するは、直だ餘事のみにして、險を行ひて倖を饒むるは、其の志に非ざるを知らざるなり。嗚呼、秦漢より以來、士 戰國の餘習に狙れ、張子房は號して傑出と爲す者なれど、猶ほ未だ雜ふるに伯術

を以てするを免れず。亮の若きは真に「豪傑の士、文王無くとも猶ほ興る」者なり。もし洎に遊び、講學して以て之を終るを得ば、則ち其の至る所、又當に若何すべし。傳に稱すらく、始め亮隆中に在りて、管・樂を以て自ら許すと。予謂ふに、亮は王者の佐にして、豈に管・樂と共に功利の域に在る者ならんや。意ふに傳者の誤りなるのみ」と。

(45)『諸葛忠武侯傳』ではここに「其所以望其君者」が入る。

(46)『三國志』蜀書一・先主傳注にある「諸葛亮集」載先主遺詔敕後主曰、『(中略)聞丞相爲寫申・韓・管子・六韜一通已畢、未送、道亡、可自更求聞達。』のことを指すと思われる。

(47)『諸葛忠武侯傳』ではここに「疑則可闕也。」が入る。

(48)『諸葛忠武侯傳』ではここに「蓋侯之心、欲昭烈以興復漢室爲己任、以興復漢室爲己任、則天下諸侯内懷亡圖者、吾固得以正名而討之矣。」が入る。

(49)『諸葛忠武侯傳』ではここに「坐務自大正其罪而伐之、則」が入る。

(50)「惜其徇」は、『諸葛忠武侯傳』では「然昭烈之爲人、徇於」。

(51)『諸葛忠武侯傳』ではここに「降操、荊・益」が入る。

(52)『諸葛忠武侯傳』ではここに「黽勉」が入る。

(53)『諸葛忠武侯傳』ではここに「大義榛塞」が入る。

(54)「如有亮」は、『諸葛忠武侯傳』では「幸而有若侯者」。

(55)『諸葛忠武侯傳』ではここに「一時」が入る。

(56)『諸葛忠武侯傳』ではここに「故予推明其本心、證以平生大節、而削史之說、有近於霸術者、區區妄意扶正息邪、而不自知其過也。」が入る。

(57)『諸葛忠武侯傳』ではここに「故昭烈謠取劉璋、於行一不義、殺一不辜之道、終爲有媿。侯當此時處之、亦有未盡焉。」が入る。

(58)「亡國」とは、劉備によつて滅ぼされた劉璋政權のことであろう。「宗婦」とは、同姓の者の婦人。『春秋左氏傳』莊公・傳二十四年の杜預注に「宗婦、同姓大夫之婦」とある。すなわち「亡國之宗婦」とは、劉備の皇后となった、吳懿の妹のこと。彼女は劉焉の子・劉瑁の妻であり、劉備にとつて彼女は「宗婦」に該当することになる。

(59)「以日易月」は、三年の服喪期間を三十六日とする前漢文帝の指示のこと。前漢文帝は、自分の死後の服喪について遺詔しており、『漢書』卷四・文帝紀にその内容がみえる。その中に「服大紅十五日、小紅十四日、織七日、釋服。」とあり、これについて顏師古注には「應劭曰、『(中略)凡三十六日而釋服矣。此以日易月也。』(中略)師古曰、『(中略)此喪制者、文帝自率己意創而爲之、非有取於『周禮』也。何爲以日易月乎。三年之喪、其實二十七月、豈

有三十六月之文。(以下略)」とある。

(60) 「失」は四庫全書本では「事」につくる。また『諸葛忠武侯傳』では「以日易月」の下が行末まで空白で、改行のうえ「昭烈之喪」と続いている。前掲「校勘記」によると、十萬卷樓本では「以日易月」の下に「後世之失也而」の七文字があるという。本論でもこれに従って『諸葛忠武侯傳』該当箇所を解釈した。

(61) 「冢宰」は周代の官名で、政務を掌り百官を統べる。ここでは宰相の意で用いられ、諸葛亮を指すと思われる。

(62) 叢書集成本、傳・同治本、四庫全書本では「因」に作るが、『諸葛忠武侯傳』に従い「固」に改める。

(63) 『諸葛忠武侯傳』では「謬之」で行末となり、次の行は「其學之未至歟」から始まる。これについて前掲「校勘記」によると、十萬卷樓本では「謬之」の下空白に「禮茲可見」の四文字があるという。

(64) 『諸葛忠武侯傳』には「且未踰年而改元」に該当する表現が無い。

(65) 『諸葛忠武侯傳』は「其學之未至歟。」の後に「然則當斷之曰、若侯者、體正大而學未至者也。故備列於此以與朋友共講焉。」と続いて、全文を終えている(この部分の字句は前掲「校勘記」の指摘を反映させたものであることを明記しておく)。この部分と、蕭常の贊にある「嗟乎、

若亮者、體正大而能充之以學、吾必謂之三王之佐矣」の部分とは、傍線を附した部分などの表現が類似しているため、「吾必謂之三王之佐矣。」までが張栻の論の引用である可能性も考え得る。だが、「嗟乎」や「吾必謂之三王之佐矣」に該当する表現は『諸葛忠武侯傳』に見出せないため、本論では「其學之未至歟」までを張栻『諸葛忠武侯傳』の論の引用、「嗟乎」から蕭常の文であると見なすことにする。本論が参照した四部叢刊續編本の『諸葛忠武侯傳』は、この巻末部分における「校勘記」の指摘が多く(校勘無しでは文意が通らない箇所もある)、同書が後世に伝わる過程で少なからず錯誤や字句の変化が生じた可能性は高いであろう。蕭常が参照した張栻の著作では、「吾必謂之三王之佐矣」に該当する表現があった可能性も十分にある。ただしいずれにせよ、蕭常の著した諸葛亮傳贊がほとんど張栻の論の丸写しであるという事実に変わりは無い。

(66) 『漢書』卷五十六・董仲舒傳に「至向曾孫龔、篤論君子也」とあるのを踏まえた表現か。

(67) 栻 又 言ふ、「予 出師の表を読み、其の嗣君に告ぐる所以の者を見るに、一に正に本づく。殊に刻核陰謀の説に非ず。故に『手づから申韓等の書を寫す』に於けるは、亦た之を疑ふ。方に亮の一たび昭烈を見るや、遂

て荊・益を取るの計を定むるは、時に昭烈 未だ駐足の地を有せず、諸國を歴觀するに、獨り劉氏のみにては荊・益を守ること能はず、是れ誠に天の資する所なればなり。若し昭烈 荊・益を以て賊を討つを忘るること無くんば、夫れ誰か取えて服せざらん。其の小さき不忍に徇したがひて大計を妨げ、故に劉琮 取る可きも取らざるを惜しむ。則ち亮の策、昭烈 猶ほ盡くは從ふこと能はざる者有るなり。狼狽して通るるに及びては、吳の力を藉り、操を赤壁に敗ると雖も、然れども終に吳に迫られ、乃ち始めて蜀に入るや、譙計を以て之を取る。予 亮の此に於けるや、蓋し亦た已むを得ざること有るのみにして、草廬にて昭烈に告ぐる所以の本意に非ざるを知る。嗟呼、五伯より以來、功利の説 天下に盈つ。亮に其の正を堅守し、利鈍を以て共には天を戴かざるの心を易へざること有るが如きは、其の以て王道なる者と言ふ可きに庶あかし。

然りと雖も、亮の學に於けるや未だ足らずと爲し、故に知に未だ至らざるの所有るなり。知に未だ至らざる有れば、則ち心に未だ盡くさざる有り。未だ能く其の心を盡くさざれば、則ち天下の事に於けるや、偏該して一に之を貫くこと能はざるなり。開國建后は、大事なり。而るに策を奉じて立つる所の者は、乃ち亡國の宗婦なり。日を以て月に易ふるは、後世

の大失なり。而るに冢宰の贊する所は、乃ち固より謬れるの禮なり。且つ未だ踰年せずして改元す。此れ以て其の學の未だ至らざるを見ること有るかな」と。

嗟乎、若し亮なる者、體 正大にして能く之を充たすに學を以てせば、吾 必ず之を三王の佐と謂はん。栢は、篤論の君子なり、其の言 爾しかい云ふ。

(68) 吳載記第一には「贊曰」が二箇所ある。一つめの贊は孫堅・孫策の記述を終えたところのもので、およそ百二十字。二つめの贊は卷末のもので、およそ百三十字である。

(69) 魏載記第一には「贊曰」が二箇所ある。一つめの贊は曹操の記述を終えたところのもので、およそ二百四十字。二つめの贊は卷末のもので、およそ八十字である。

(70) 本稿で挙げた字数は筆者が数えたものであり、おおよその目安に過ぎないことを明記しておく。

(71) なお、「贊曰」の文字数が多い巻としては、他にも列傳十四がある。同巻は譙周と黃皓を扱った巻であり、「贊曰」も二箇所ある。一つめの贊は譙周の記述を終えたところのもので、およそ三百五十字。二つめの贊は卷末のもので、およそ四百六十字。合計すると八百字を越える。蜀漢滅亡に大きく関わる人物二人を扱った同巻であるだけに、蕭常も多くのことを述べたかったであらうことが分かる

文字数となっている。ただし、この文字数は二つの「贊曰」を合計したものであり、それでも諸葛亮傳の贊の文字数に及ばない。

(72)『三國志』蜀書四・二主妃子傳によると、皇帝に即位した劉備は、夫人であった吳懿の妹を皇后としたが、その策文によると、皇后の璽綬を授けるべく派遣されたのは、他ならぬ諸葛亮であった。

(73)『三國志』蜀書二・先主傳に、「亮上言於後主曰、『(中略)乃顧遺詔、事惟太宗(後略)』とある。中華書局本(本論では、陳乃乾校點、一九五九年初版、一九八二年第二版、一九八八年第十四次印刷版を参照した)では「太宗」を「大_宗」につくるが、本稿では百衲本に従い「太宗」として読むこととする。また、ここでの「太宗」は前漢文帝を指すと解釈する渡邊義浩・仙石知子『全譯三國志』第六冊(汲古書院、二〇一九年)の解釈に従う。おそらく張_枏もそのように解釈したからこそ、「以日易月」という表現を用いているのであろう。ただし、諸葛亮が言及する劉備の遺言における服喪の内容には、(現存する史料から判断する限りにおいて)「以日易月」が指すと思われる服喪を三十六日とする指示は無く、「動容損益、百寮發哀、滿三日除服、到葬期復如禮。其郡國太守・相・都尉・縣令長、三日便除服」とあるのみである。一方で、

文帝の遺詔には三十六日の服喪に関する指示だけでなく「其令天下吏民。令到出臨三日皆釋服」という指示も見える。となれば、諸葛亮が引く劉備の遺詔の言う「事惟太宗(事は太宗に_{しか}惟ふ)」とは、「天下の吏民は三日で喪服を脱げ」という前漢文帝の遺詔に従う」という意味だと見るべきであらう。とまれ、ここで張_枏が言う「以日易月」とは、服喪に関する文帝の遺詔の指示を指すものと見てよいと思われる。以上のことを踏まえると、前漢文帝の服喪に関する遺詔を「後世の大失」であると見ていた張_枏は、諸葛亮が「前漢文帝の遺詔に基づいて喪に服すように」という劉備の遺詔に従うよう劉禪に上奏したこと

(74)『論語』子路第十三にある「名不正則言不順、言不順則事不成」を踏まえた表現。

(75)「正始」は魏の年号として知られるが、そのように解釈してしまうと、正始は西暦二四〇～二四九年に用いられた年号であり、一方で蜀漢の滅亡は西暦二六三年なので、「盡後主末年、始係魏年號」という張_枏の主張とは計算が合わない。ここでの「正始」は「正しい始まり」あるいは「はじめを正しくする」の意で解釈しておく。

(76)予 毎に陳壽の私にして且つ陋なるを恨む。凡て侯の_{すく}略次第、夫の微を燭らし患を消し、國を治め人を用ゐ、

軍を馭して師を行^やるの要とは、悉く闇くして章らかならず。幸ひにして他傳及び裴松之の注する所に雜見されれば、因つて哀^{あつ}めて之を集め、敢て辭を飾りて以て其の實を忘れず。其の妄りに實に非ざるを載せる者は、則ち之を刪る。庶幾^{こひねが}はくは讀者 以て侯の心を得る可し。近世 鉅公 史書を作りて年を編むに、乃ち魏の年號を以て漢獻の統に接ぐ。故に其の書する所、名 正しからずして言 順はず。予 謂ふに、獻帝 廢さると雖も、而れども昭烈は正義を以て蜀に立ち、武侯 之を輔けたれば、漢統 未だ地に墜ちざるなり。要す後主の末年を盡くして、始めて魏の年號に係^{つな}ぎて正始と爲さん。

(77) 習鑿齒は臨終の上疏において「臣每謂皇晉宜越魏繼漢」と述べ、晉は魏ではなく漢を繼承したのである、という主張を展開している。拙著『中国知識人の三國志像』(研文出版、二〇一五年) 参照。

(78) 『資治通鑑綱目』は、蜀漢滅亡後の甲申(二六四)から己亥(二七九)は元号を採用せず干支のみ表記し(この間、魏と吳の年号は、干支表記の下に割注で記される)、庚子(二八〇)以降は天下を統一した西晉の年号を採用する、という体裁になっている。

(79) 「桓」は欽宗の諱であつたため、蕭常や張杖の生きた時代では避諱すべき字であつたはずであり(前掲『史諱舉

例』参照)、この表記には疑問が残る。實際、蕭常は『續後漢書』の別の箇所では齊の桓公を「威公」と表記している(前稿一参照)。

(80) 予 既に侯の傳を作りて以て新安の朱元晦に示すや、元晦 予に當に管・樂を以て自ら許すの事を載せざるべからざるを以てし、「侯 後主の爲に申・韓・管子・六韜の書を寫す。昭烈に荆・益を取り、以て伯業を成すことを勸むるに及びては、見る可し、其の學びし所 未だ駁雜たるを免れざるを」と謂ふ。其の説も亦た美^よし。而れども予 意ふに未だ盡くさざる者有り。侯の足らざる所の者は、學なり。予 固より謂ふ、もし侯 洙・泗の門に遊び、學を講じて以て是を終るを得ば、則ち至る所は又た予の知る所に非ず、意を深める無きこと不^あずと。然して侯の胸中の存する所は、誠に三代より以下の人物の睥睨す可きに非ず。豈に管・樂の流ならんや。時には萬變有り、而して事には大綱有り。大綱 正しければ、則ち其の變 得て理^{こと}む可からん。方に曹氏 篡竊せんとするの際、孰をば天下の大綱と爲さんか、其れ惟だ賊を誅して以て漢室を復するもののみ。侯 既に身を以て帝室の英胄に従ひ、強弱の勢を顧みず、允に此の綱を執り、終始 渝^かはらず。管・樂 其れ能く之を識らんや。もし侯 齊桓の時に當たらば、必ず能く天下を率ゐ、尊王の

義を明らかにし、王室を協相し、西周を復することを期せん。其れ肯へて自ら其の國を富ましむるに務めて天下の大訓を忘れんや。もし侯 燕昭の時に當たらば、必ず能く名を正し國を定め、其の民人を撫し、天吏と爲りて罪有るを討ちて以て天下の心を一にせん。其れ肯へて一時の近効に趨^はり、志は土地珍寶に在りて自ら「功は是より大なるは莫し」と以爲^{おも}はんや。其の心度 侯と絶^{はな}だ相遼邈たり。故に書して以て觀聽を惑はすを欲せず、本を抜き源を塞ぐの意なり。

本研究は、JSPS科研費JP19K00114の助成を受けたものである。

(たなか やすひこ・実践女子大学准教授)